





本編明治十年八月十日
神戶 岡本物造
出版 三丁三ノ丁
辻岡友助

へ14
2689
1



夜嵐 よあらし

永島

阿衣 あきぬ

孟齋

花廼 はなな

画

芳川

仇夢 あだゆめ

上の巻

俊雄

岡本

勘造綴



金松

堂梓

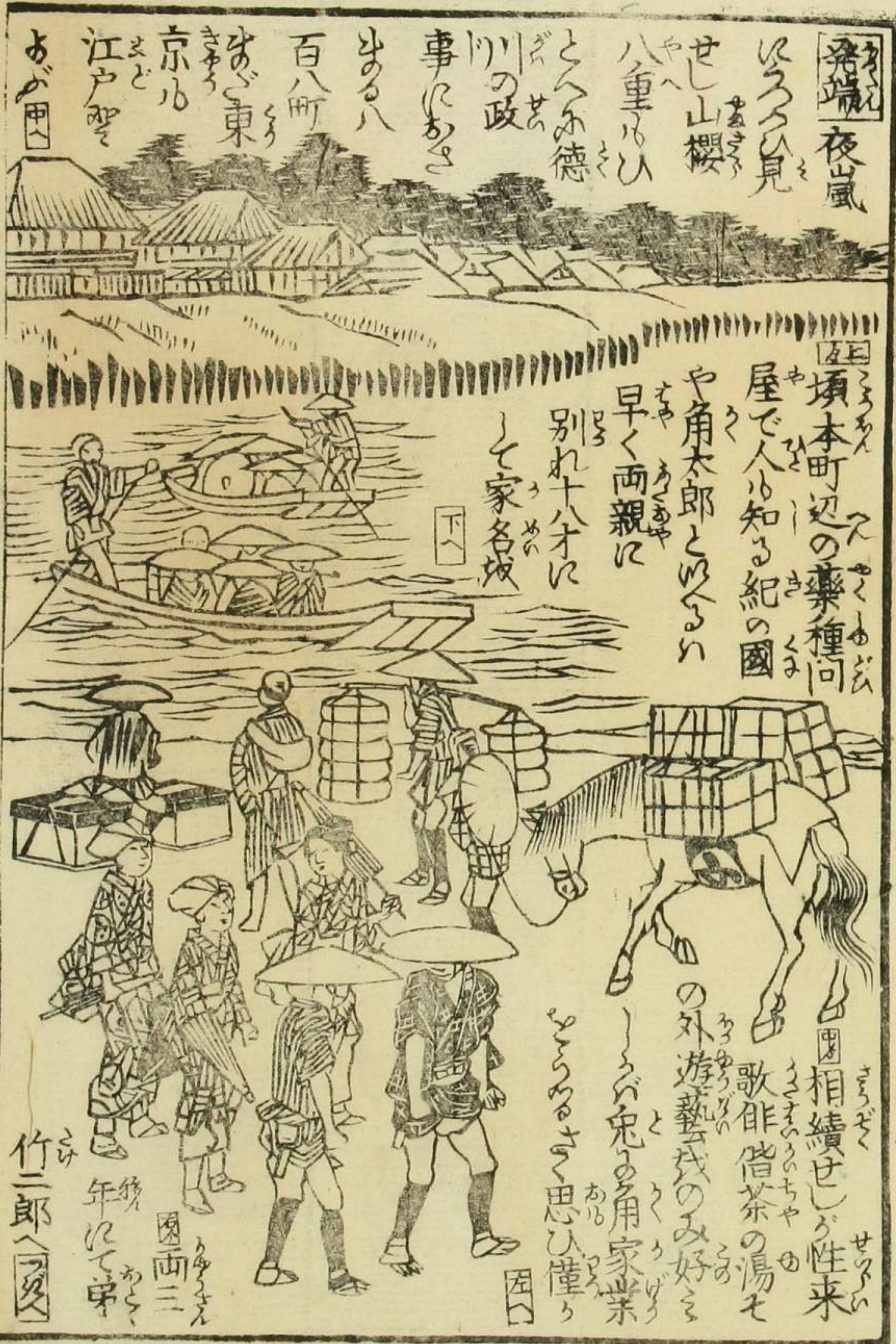
けのまき

夜嵐於衣花廼仇夢初篇緒言

我がまきの新編第三百廿号(本年五月廿八日の紙上を以て其発端を説起し号を逐て連日掲来りし毒婦阿衣の傳ハ其実録に據て余の戯れに筆を起らせしは固らば看客此喝采を蒙り新紙の發賣多を如ふるの采を得たれど既に紙上に示せし如く拙優亦川権十郎の貞瑞鶴たりし時同人を懲役又陥れ其身の嚴刑に處せられたる大眼目(只阿衣の末路の一事のみ其生涯は奸悪を数ふれば数條の珍説奇談多端に凝り新聞紙面に悉く能はざるのみをら一場の説話も数号に凝るを以て看客或ハ其首尾照應を誤るの憾なきにあらねば金松堂代主人の乞に應じ半途にして紙上掲載を止め岡本子をして之を双紙に綴らせ爰に初編を發兌せり題して夜嵐阿衣花廼仇夢といふ其顛末を記するや曾て新紙に掲げしものと故らに参差表裏を示すを以て頗る看客の心を樂ましむるものあらん

明治十一年六月 芳川俊雄記





夜嵐
 八重山櫻
 徳川の政
 事にあそ
 出る八
 百八所
 東
 京
 江戸
 かの甲

夜嵐上

頃本町辺の薬種問
 屋で人も知る紀の國
 や角太郎とていふ
 早く西親に
 別れ十八才に
 とて家名成

園相續せしが性来
 歌能借茶の湯そ
 の外遊藝の好み
 一の免の用家業
 思ひ僅う

竹二郎へ
 年にて弟
 園西三



夜嵐

日本橋の
 旅の
 吉

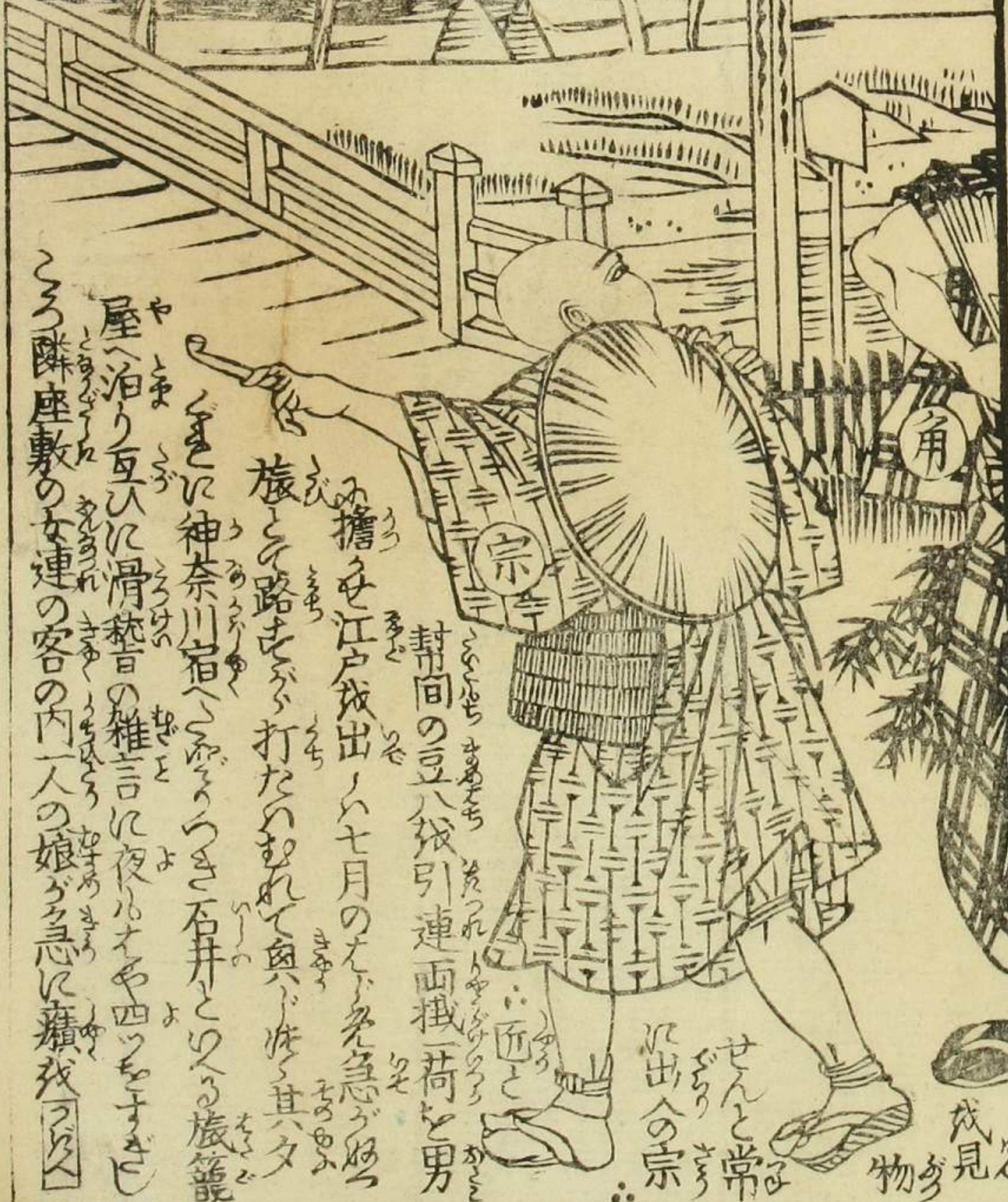
徳川の御家人
 三吉勇次郎

名跡 我譲る自
 多の豫
 志人
 牛島
 の切
 小梅の
 別荘
 へ移り
 さみて



賞て風流にのみ世を送りし
 今年の残
 暑のついでに凄き秋
 花を樂しみ
 夕べの月夜
 思ひもち
 箱根の
 治る江の
 島え

舟だ定ま
 れる妻を



舟だ定ま
 れる妻を

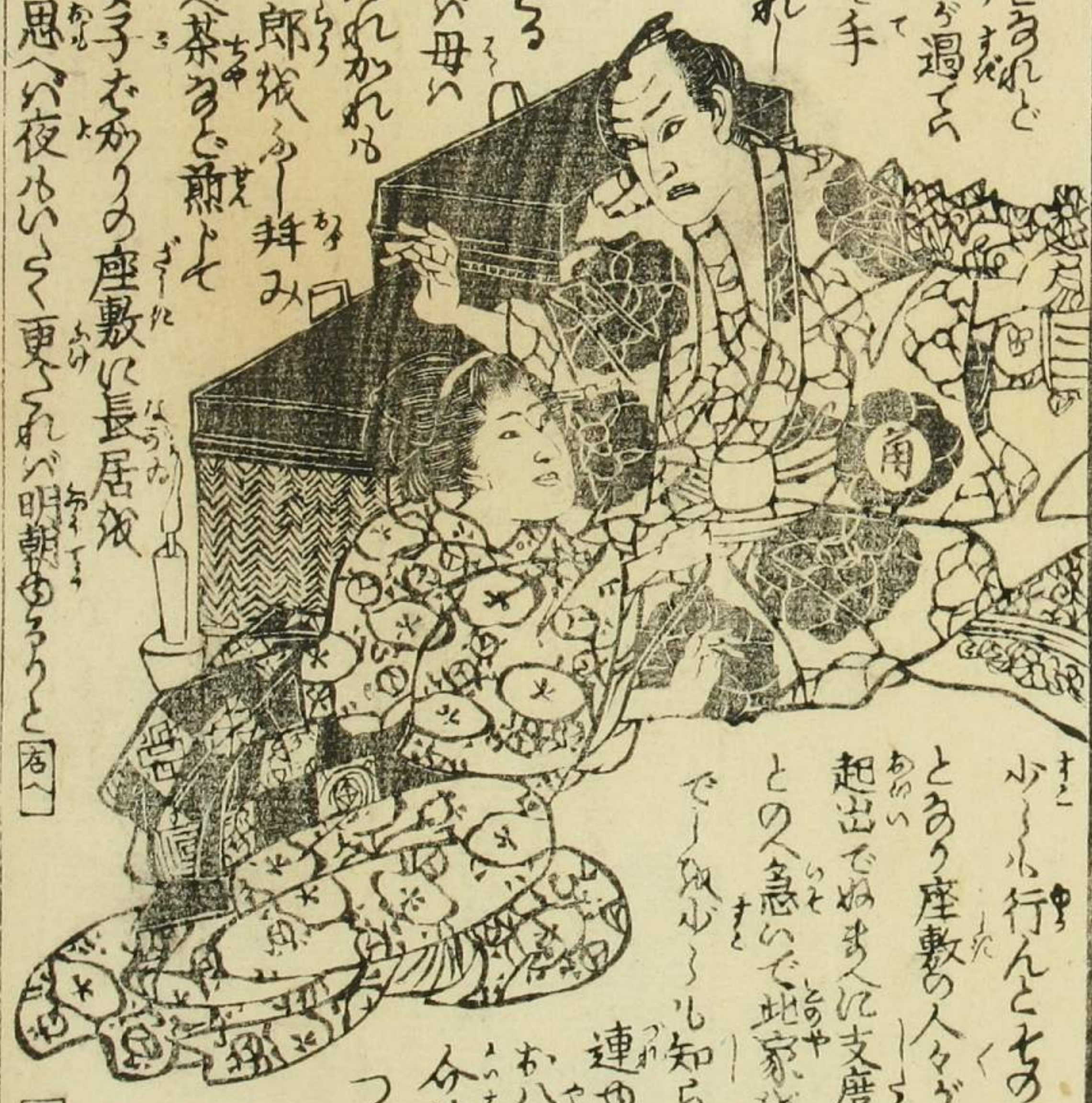
舟
 宗
 封向の豆八旗引連両横二荷と男
 担を江戸旗出の七月のたれ急がぬ
 旅と路を打たれぬれと魚洗其文
 宗に神奈川宿へつと石井といゆる旅籠
 や泊り互いに滑稽の雑言に夜もや四つもすまじ
 隣座敷の女連の客の内一人の娘が急に癪茂る

左目め
 お目め
 其場様
 互ひあ卧
 床へりこ
 るるがかる混雑の中
 前もど我尋ねるて我失
 念せしとぞ扱れ紀角の
 群い用ゆる後にはねが日
 中暑氣のそげし同を
 休まん程は涼く内ふ



右
 おじてとぞおるる様子にて其母親と思ひまぶ煩う
 にあ八重くと呼いけれと更に治る模様も
 るるれ昔々當座の体るる角太郎の
 氣の毒に思ひ家業がごとそ
 士ぬこひみ良薬我貯これ
 と見知らぬ女の其
 中へまよふ夫とこ
 りひかひ宿の女
 と近く招き
 薬の工我り
 へこめ隣座敷へ
 りひへこれ方
 こと悦こひてかきり

少も行んとその羽朝
 とあり座敷の人々がまだ
 起出でぬまに支度成と
 との人意いで此家成方の
 ぞ一奴心も知らぬ女
 連ゆり
 お八重の
 介抱に
 つれ
 りのる



ともいふまゝいふていふまゝれど
 強き薬をれば分量が過る
 るぬと自身に行て手
 つかぬにともはめられ
 病人の口へ薬投す
 ぎこみしにその効
 りも強よしとみま
 癩も時にひひにひひ母の
 尚さ附そふ女のたれかれも
 伸るやをかり角太郎成り拜み
 かるるくお禮成の茶を煎とせ
 ルておまんせしが女子をかりの座敷に長居成
 きるるいふまゝんと思ひ夜いふと更これ明朝もさうこと

江戸の住家帰るけり夫は別替角太郎の群の憂事
 知らぬ氣散の旅の道なき夜
 早く宿に着て箱根の湯治も病の
 何れぬ身の汗流すの外涼
 内いほちこちと鄙珍らしき見物に
 疲れて帰る宿屋の緑なる風入り
 ぬれぬ衣と美はげ暮るど
 圍んで樂みける庭の彼方
 の離れ座敷端近く祈り立
 出て此方眺め附の
 女中と何やら轟き
 合て打戯るるけり
 加は婦人の年の頃干



意底 汲て 言
 七海 意底 汲て 言
 意底 汲て 言

余りにて纏致
 勝れて麗しく
 起居の様の老とやうに析目正しと振舞はるる大名の
 お部屋さる少の病氣をいひて遊散るるの
 湯治と其附人の少るはてぞ知られ
 ける紀用の朝夕顔見合せ
 世の兼と
 き婦人
 と交ぬに
 尻あどつき
 何ひ又も天女の来迎と眼が慰むるやう
 ほど厚
 心腹





○此処の東海道程ヶ谷宿の裏
 手に河の金沢鎌倉への近
 路の下の大國の山中にて
 まだ日の暗き路傍に繁る

父あつぬ名をいふま
 と恩愛深き母親地
 歎き成河とあゆりくと人
 の談り聞きおれ箇
 路をたるとお八重の心
 か細き流れる岸に
 その路めかえの勢
 根ふ腰も搦てホッ
 と息つくと救身あつた怖
 りやあつて来い来い事を
 斯般路へまらつての最早
 逐手に来い来い思ひの
 外に草臥れれば



その暇の限が通りし
 見へ女中の群の富野を立出で
 江戸の方へ帰りのち紀角の爰
 四五百余り遠道せし同野に
 るのみ天女が影成ゆせし故

せめ
 天
 女の
 岩屋ありとる拜せん
 るのと二人の連
 杖促して江
 の島と

並木の
 松の木の梢
 そるねも曉鳥
 かあはくの声
 聞も今更
 此身につま
 されて思ひ
 あはせ入
 であし道はそ
 むけもさり



文問屋

地本錦繪

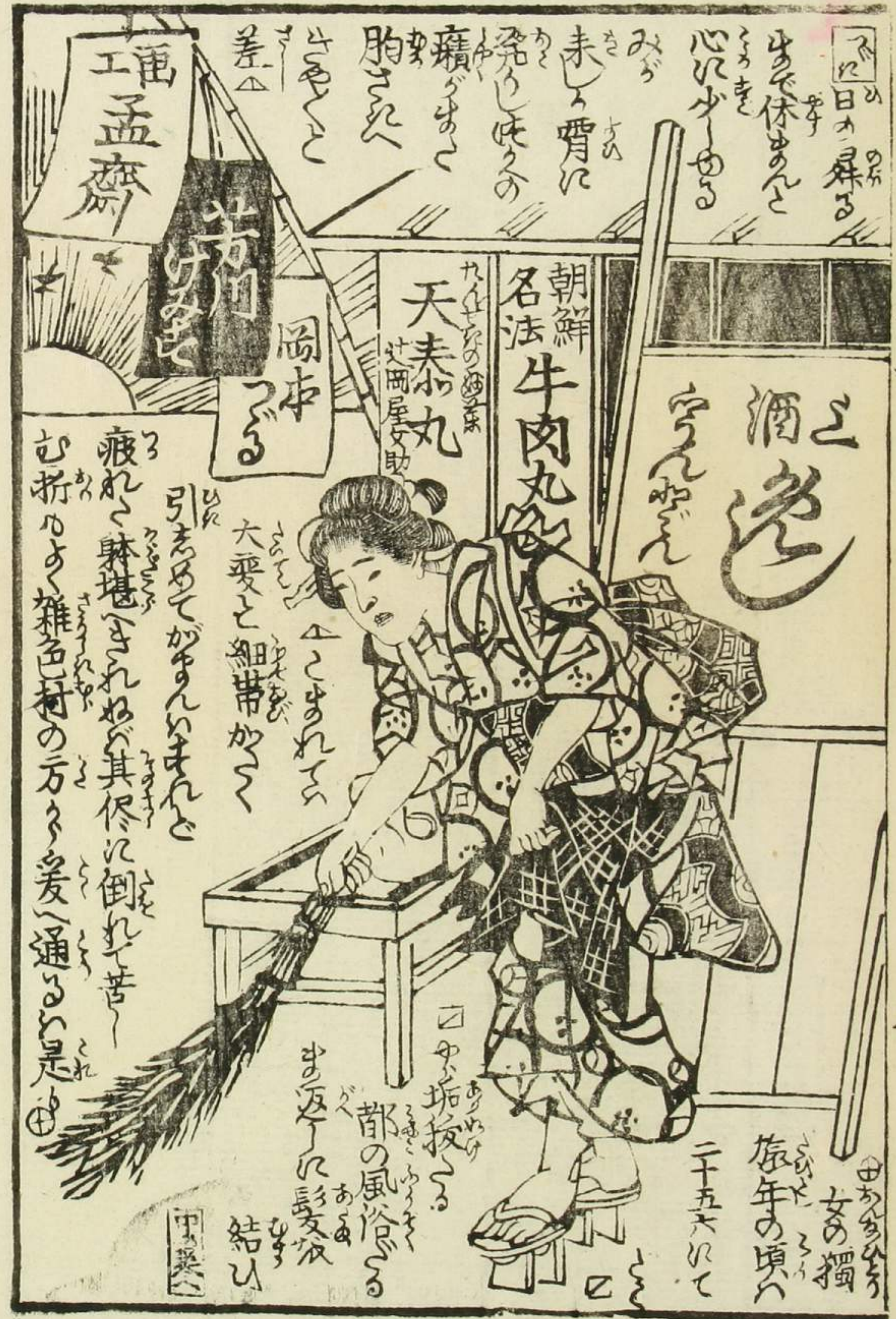
出版御届明治十二年六月十八日第大區一小區深川富岡門前町六十五番地

編輯人 岡本勘造
第大區十三小區横山町三丁目一番地
出版人 辻岡文助

官許 天恭丸
たんせきぎの茶
錫入一色代五錢二厘五毛

朝鮮 官許 牛肉丸
名法
大色代二十五錢
中色代十二錢五厘
小包代五錢三厘五毛

此茶は男女老若くもよく飲むべし...
天恭丸之效は第一たんせきぎのせん
お〜〜〇ら〜〜ま〜〜の〜〜
〇す〜ぬん〇ま〜や〜あ〜〇たんせきん
さんごのせだ〇小色百回せだ〜
一切のせき〜用ひて功強進〜あり
委後ハ中絶お〜死〜小



工孟齋
天恭丸
酒と迄
大要と細帯か〜
引きめてか〜い〜ま〜
疲れ〜躰堪〜れ〜其〜倒れ〜苦〜
む折〜れ〜雑色村の方々〜爰〜通〜は〜是〜

朝鮮 官許 牛肉丸
名法
天恭丸
大要と細帯か〜
引きめてか〜い〜ま〜

都の風俗
結ひ
女のみ獨
旅年の頃ハ
二五六にて





夜嵐

於多由

洗ゆ女

よ川岡

おう本俵

孟多画

糸松

虫様

の中



白地の浴衣を高く端折て笠箆斤手次ぎとくぐり通

かたてお八重が見はけて立やあり獨りてうらぶる帯の間

の紙人多何女薬を取出てお八重の後廻り抱き起し

省成るであら

錫の中

薬

お八重の口へ

の事との塩梅お

嬉しと思ひませ

お供の衆の

毒薬を以て買
 びてしめられしや向られ
 てお八重の涙を拂ひ私や
 獨り鎌倉の者で供を
 りんめいばあやまの者種
 病気がよき困り申すお蔭で
 ござらう治すの道ござらぬ
 女の不審顔みれば愛りの
 お方での獨りで旅哉の
 仔細のほどは苦一か
 他事あるにあらぬ八重
 その親切にたて包み
 るは鬼うちかみ實のた



△かぐだの大毒
 召る夜露に
 れてはあ
 里出て乾
 加あ
 つつこ
 ちあ
 まこる河
 り免にか
 く
 う

江戸本石町の豆腐店
 屋の八重と申す者
 先年親父が亡なつて聞
 女の打たれしや柳やね



元日たじが
 日本橋へみあし頃
 お宅おきて知てありませ

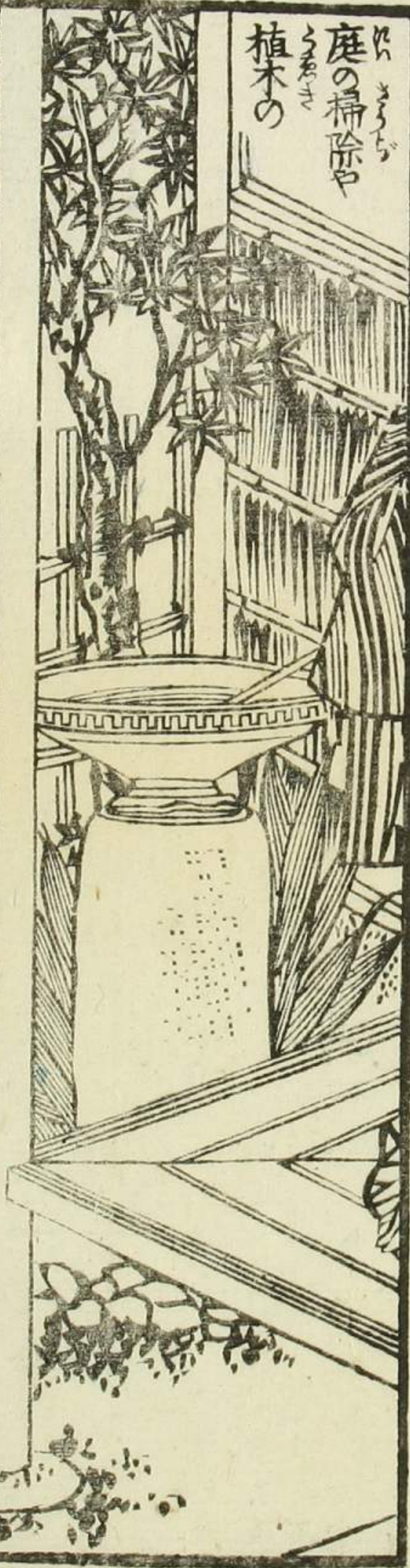
山の中朝風
 大方分り
 程々谷
 の方へ



伴のひの。叔角太郎の残暑
 志のさけりまは見ぬ箱根の湯治場か
 江の島鎌倉と憂て知らぬ遊散旅
 二人の伴の真なる哉笑あやうう。日數も
 松風身れあむ程のい
 土産のまのく買の駒一隅田
 の牛島でたつ小梅の養へ啼ひ八月
 るふの頃ちの角太郎の風流の
 の女に成すは浮世の事哉

い
 あり奉公
 大い多ううらま

庭の掃除や
 植木の



折々の出入の者うあれこれ程よくさるに任せおれ小女人扱手元に使ひ食事の世話あてをせおれ
 一か旅の苗主中し不用心ありとて本町の本宅に年々一召使を芳とりの四十二三の心手たる
 女も苗主居にむと知るべし今朝角太郎あそく卧床成をさるで稼をさふみちりやい
 哉見廻し心の回みまはれたれ庭の景色が加りうこのびあつて隣りの寮成の玉にのみ不
 審る顔でおせ方成の隣は是あて明家であつてさうさあれ越してされと尋ねお芳は両手
 成つたまう申しあげねとつひ此頃さるお名のお妾にたうお名前いささ様とつその

「殿様さま、
 るれいのでん隠
 居成るため
 此玉家の察致
 ち買のされま
 らの餘程うら
 お妾さまでござ
 す夫はついでに昨晩
 一寸申しあげは
 先生や豆八さん
 の前残りぬき詳
 しくお咄しいた
 せせんう



④松坂屋の娘の
 て十四の時に父が言
 り母は後家成るん
 と夫々覚悟成な



ころや戸に
 折入てお願
 申す本願
 長い咄しを通りお聞き
 るこれ下は且那のち田主へ願
 娘のいその以前此は下給の物めく江戸へ出て
 来たあり草鞋をぬぐお吉も本石町の呉服店

これいまだ若
 き後家ごし却
 つて世間の口
 うさ手廣
 き家業に
 女王の届
 うねがち
 と親類
 方の
 め
 りよ

店次はつづる番頭の彌兵衛とて入婿の跡にゆく其頃の
此のたけの暇にあり夫も誰も番頭の彌兵衛の四十に近き身で
見つけにぬ色好み間もあつたはれとて捕入てのやると
そかりのふをまじり断りて残遺恨は兎や角あつて残りの
こらて追出せし夫も且那の処へより今日目暮るも思は
つづる婿とて又引入て面の憎さ彌兵
衛にて假にも親とまねる
身でいづら主人の娘手へ
無体なる戀慕はさる女
るに附まらるるは仕打
残母親とて必らばこの心とて
る身其入恥かまらるる子の道もす殊に
世間の外聞をいふものも身ツの憂成思ふ



甲斐のつて
顔の色つや
身体の衰う人
原の通り全
快せしとく
先月
初めに
女連四
人下江戸
痛る
時神
奈川
宿泊

日を送る深田女の氣苦勞うつめに
病後引おとじがくちやむその上に
瘡まで知て折々の煩ふて
多うりければ醫者の勧めで五
月雨のや暗いころ母ごと外に女
中二人取引つれて伊豆の
熱海湯治の
保養に二月
あまの世の中の
憂をまじ
まはれ



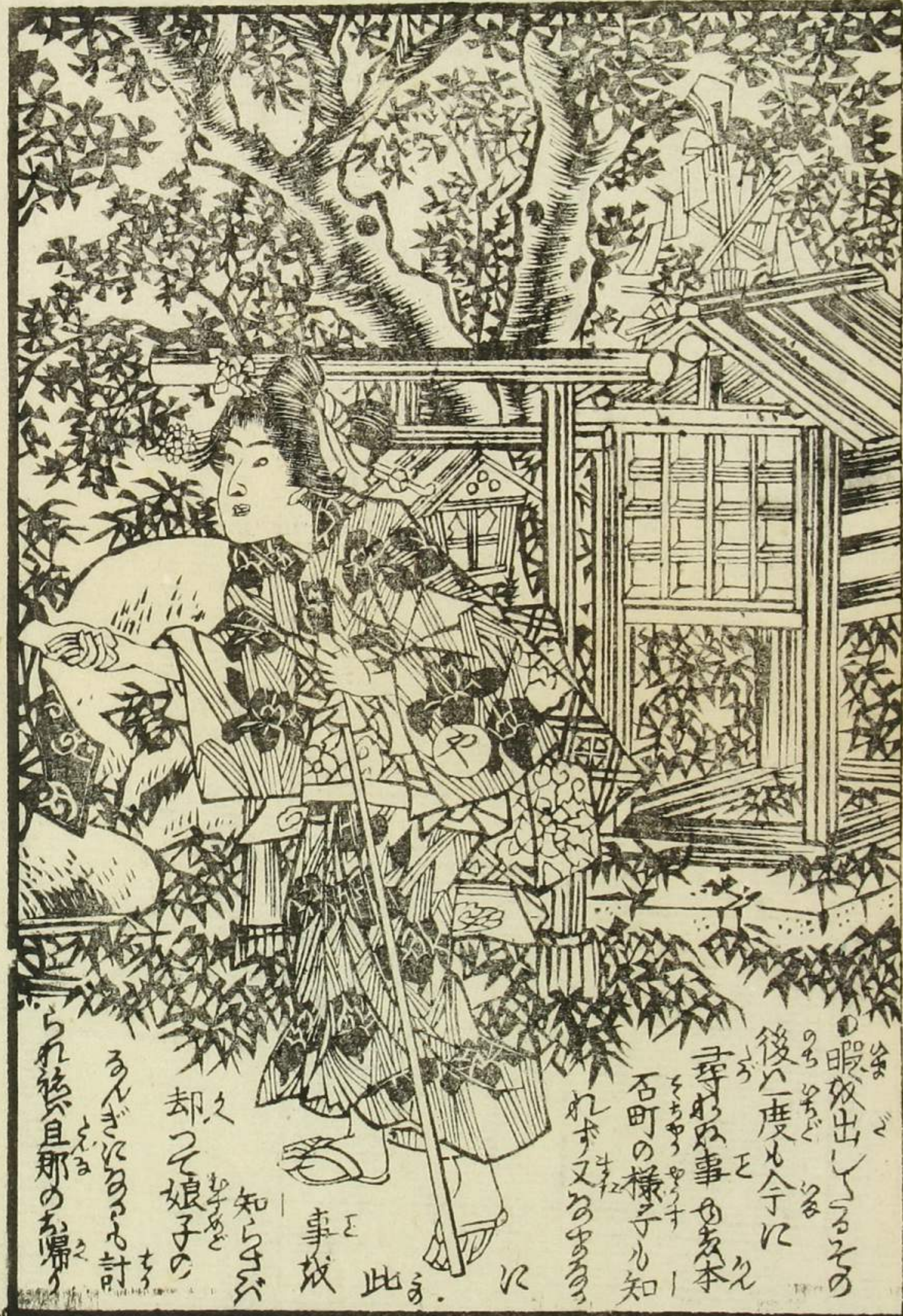
兵衛の種々
かた口説きとらやと思ひま
とせり煙する此よ
明日
家
立
又
彌

不^レた^レ何^レれぬ悲^しき成^に誰^に語^らん人^もあ^らずこれ^のこ^のま^の筋^を此^の家^を
 ぬけ出^しかぬ^に往^来未^だ見^えぬ^に鎌^倉道^成尤^も入^り松^ヶ
 岡^の尾^寺金^身成^のせん^と覺^悟い^くも娘^の氣^の案^を
 ト^つづ^かふ^はと^やさ^に久^く忘^れ持^病の^瘡に
 と^ろろ^めれ^開き^つか^ぬ成^隣座^敷の^お家^に
 救^えれ^疲れ^て伴^の寝^入り^ころ^身成^隠す
 と^のみ^書置^して^其庭^口に^忍び^出し^た
 う^た夫^と見^てあ^の程^々宿^の横^道
 迷^ひ入^る山^中
 其^夜も^明て^鳥
 の^多く^頃又^も
 瘡^にと^ろろ^めれ
 幽^む野^へ通^りけ^ひ



本店^の四^郎吉^の件^で
 此^方の^顔出^し私^の姪^の
 お^吉が^在野^々此^地へ^歸る^途中^に
 何^れ種^々今^抱成^{した}上^で名^前
 取^きけ^ば伯^母の^私が^夫思^う
 け^たお^主の^娘の^おの^の成^に
 何^れと^もあ^らず^さら^うと^て
 宅^へ歸^らぬ^覺悟^を
 街^道へ^伴て^出バ
 尋^ねぬ^人に^見つ^ひら^ぬ
 と^神奈^川宿^の裏^手成^に
 通^り野^毛の^知音^に立^ち寄^り芝^を
 濱^へ出^る押^送り^便船^にて





暇放しつゝその
後八度も今に
尋ね事の本
石町の様子も知
れず又ある事
に
事此
知らず
却て娘子の
あんなに
られ後且那のお帰



此地へ
来りぬのまきも今
他人の家へ居る
人の世話で届く
且那のお苗主と
此にたゞ外へ出
委しく語りその
後の計らひの方
りて彌兵衛め

よ
上
よ
事
とかくさひ
娘子に
そて下され
の恩忘れ
その深切
る長物語
太郎感心
聞き終り



縁ゆかりまたたいては海うみへ
 誰たれも白しろ髭ひげの神かみ
 るる身みを如何いかに
 せん世よはれし島しまとありす
 尻しつにありみ浴衣ゆかたの
 日ひを癩かにとち
 れ取と乱らん
 〽〽〽
 その
 様さま成なり見みられ
 方かたと思おもひ今いま
 さう恥はしく礼れいの辞ことば
 何なにと名なさた口くちのくち

夜嵐中



次つぎ第だのついでの
 小この娘むすめは八重やえといふ
 不ふ審しんのと問とは
 お芳よしのついで如何いか
 且かつ那ながその名なを
 と不ふ審しんのと尤なほも
 八重やえといふ神かみ太た河が川がで泊とどりあり
 癩かにとちれ母ははも八重やえと呼よび
 さうだ見みかみて此こゝ私わたしが進しん境けいの薬くすりで漸し々し
 開ひらきつゝの娘むすめ子こも何なにも不ふ思し儀ぎ
 事こととお八重やえ夜よ爰ゑ呼よび互たがひ
 見みかた顔かほとか海うみ尺せせぬ



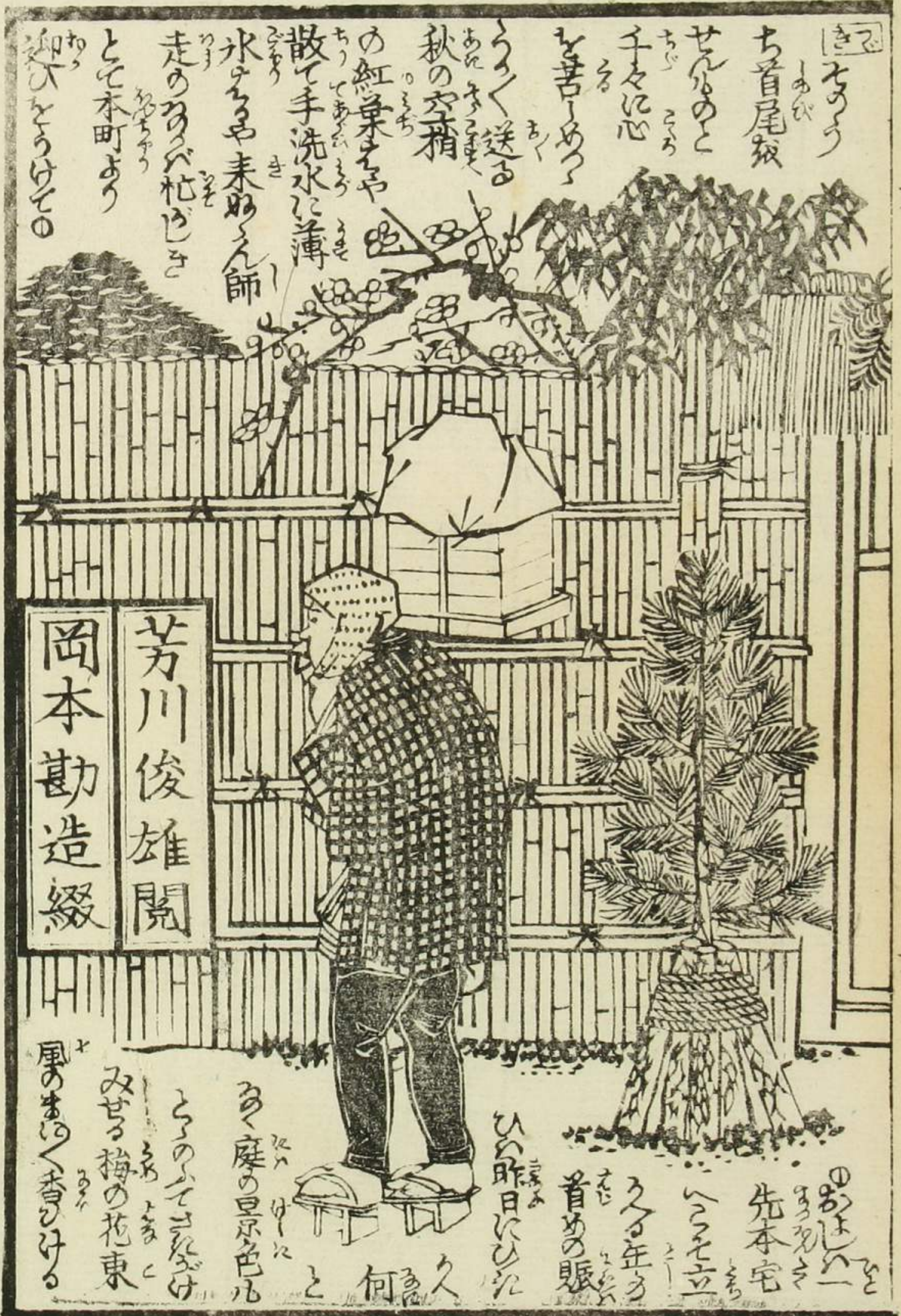
知つての通り何事も家後
 任せておくれぬれ及ぶ事
 あつしと井か力にあらう
 この様
 お前が難
 儀を
 せぬ中
 先きのせう
 りとめ不自由
 ろつと心おた
 あれぬ情の言葉に
 重なるあはれも嬉しく目へ
 送らう中互ひに心ほりま山い
 又見口

仕合せあらんと
 心の内に喜ぶと
 人の娘成沙汰
 色に
 今
 思はるる捨あつて
 思はるる捨あつて
 思はるる捨あつて
 思はるる捨あつて



上よ
 様か
 己れと優
 ことへ
 角太郎お前が
 たより思
 あはれ私
 少の時世話

下紐
 有
 知れど



ち首尾
 せんものこ
 千々に心
 を苦しめ
 うつく送る
 秋の空稍
 の紅葉を
 散て手洗水に薄
 氷を名未ぬえ師
 走のありたじき
 とて本町あり
 御入をうけと

岡本勘造綴
 芳川俊雄関

先本宅
 へこそ立
 うる在る
 首め賑
 ひの昨日にひた
 と何久
 多々麻の景景色
 とのてこれけ
 ぬき梅の花東
 風のまはる香ひける

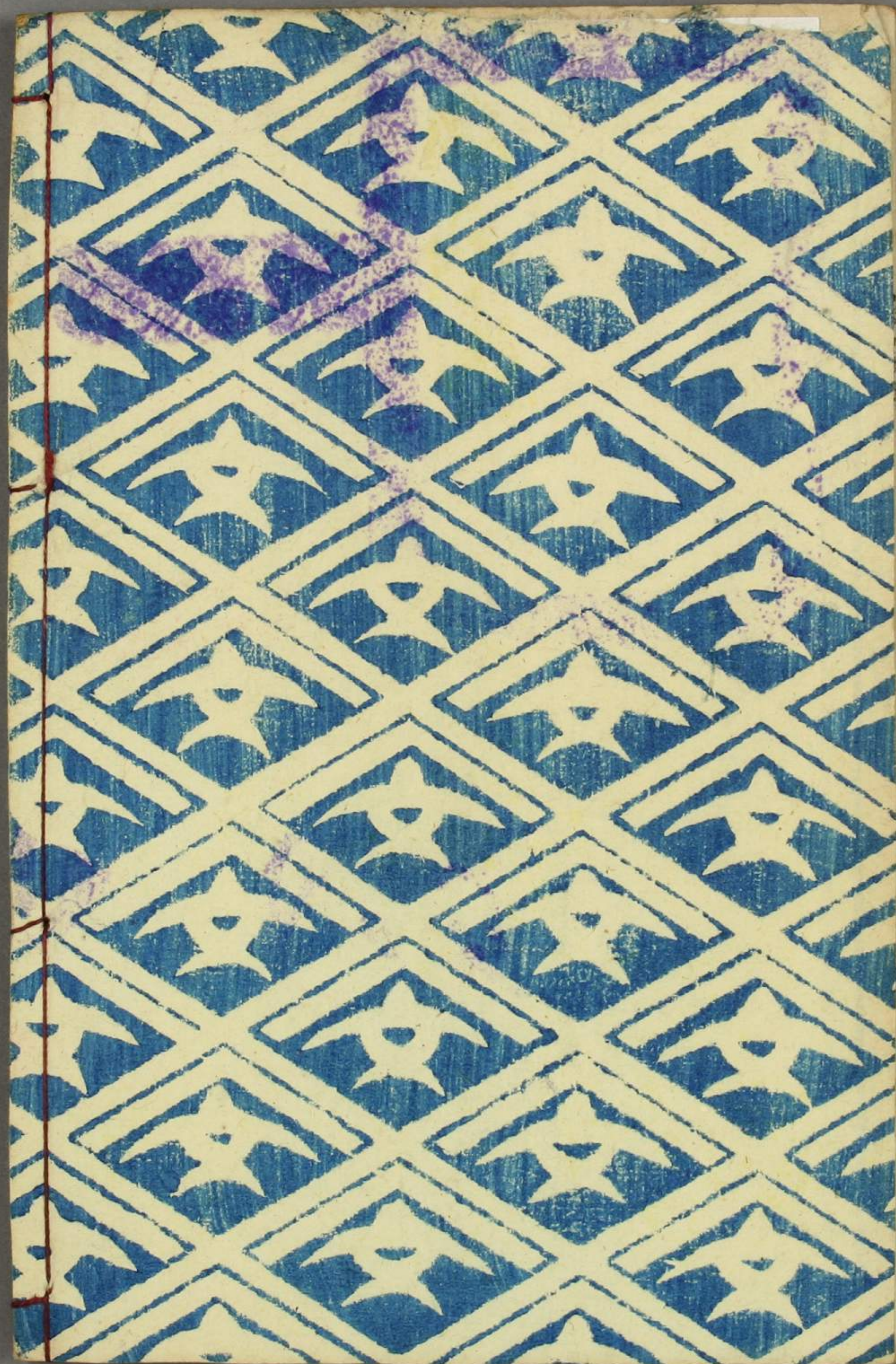
朝鮮 大色代二十五粒
 官 牛肉丸
 名法 中色代十二粒五厘
 小包代五粒五毛

官 天恭丸
 ちんせきとの茶
 錫入一色代六粒二厘五毛

此茶の男女老若の味は別れり
 分一の内をその味の少く多き
 あり茶葉は此用の味氣あり
 止むるあり一たんきやまの味
 あり茶葉の味をいへば病は治
 りませるあり茶葉の味をいへば
 病は治るあり

今文 地本 錦繪 問屋

出版御届明治十一年六月十八日
 第六大区一小区深川富岡門前町六十五番地
 編輯人 岡本勘造
 第二天區一小区横山町三丁目一番地
 出版人 辻岡文助

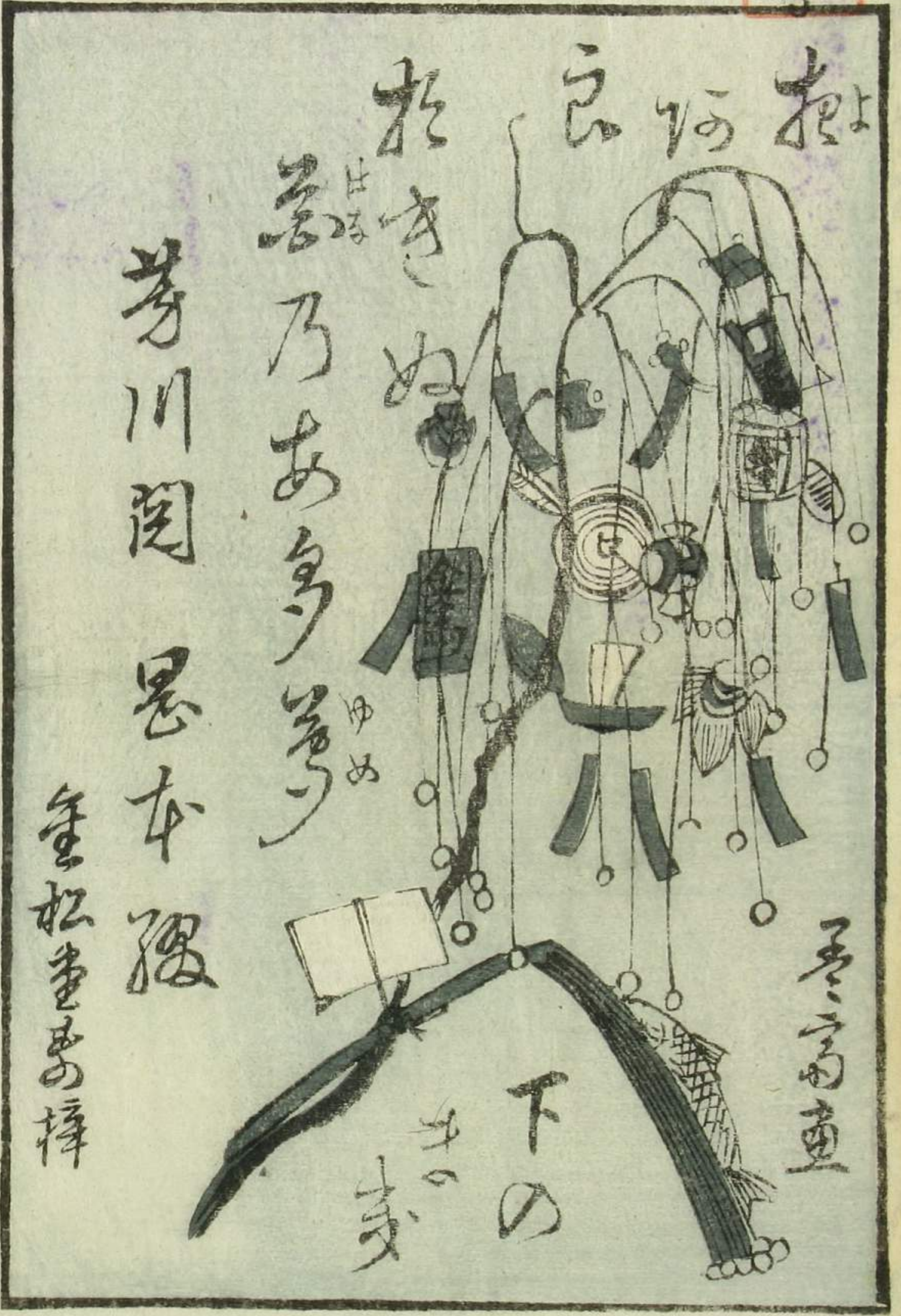




一賞
長山
香川俊雄園

初編下

へ14
2689
3



おの 良河 柳

おの 乃 女 多 乃 多

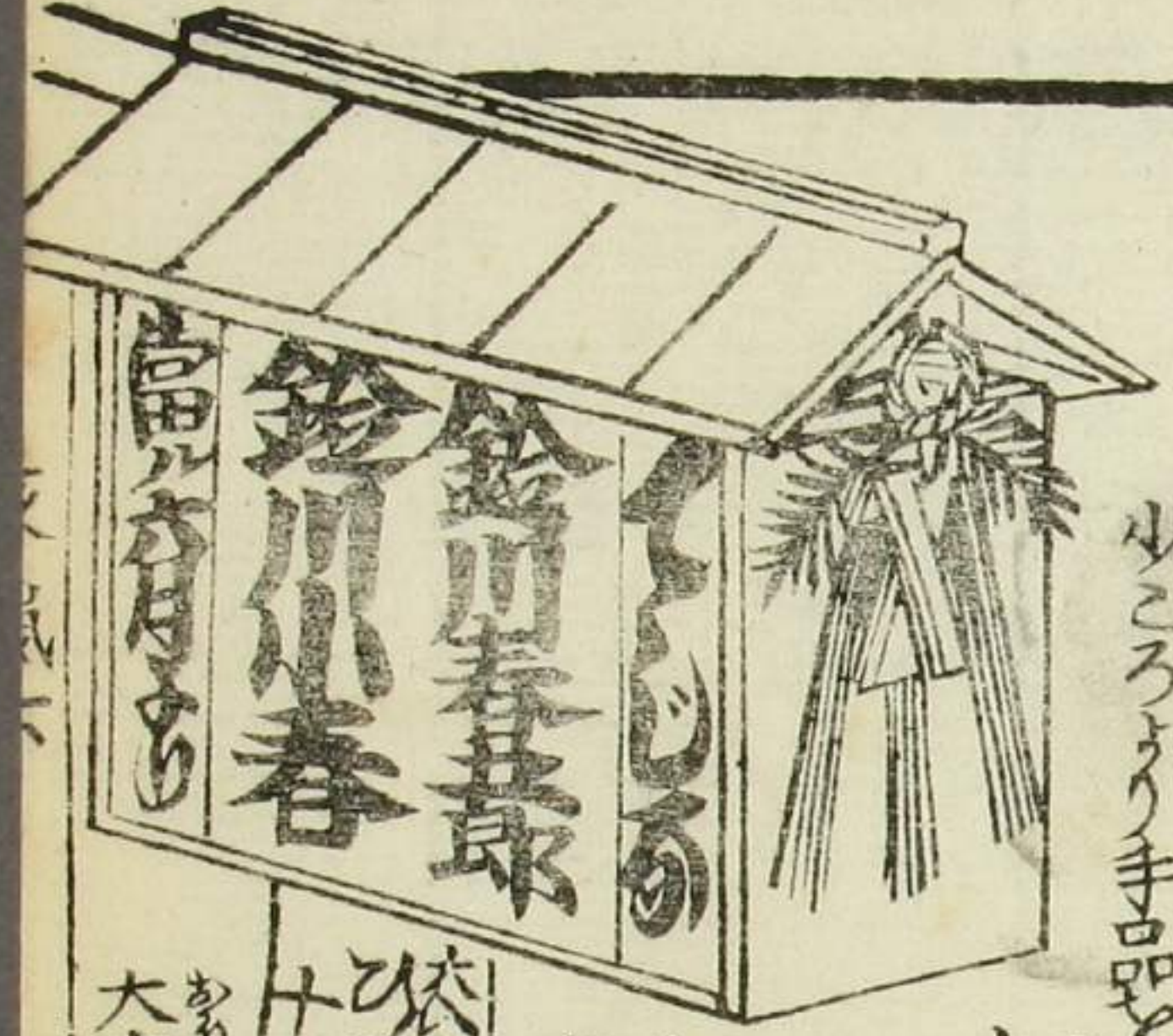
芳川 関 忌 本 腰

年 松 重 馬 の 様

下 の

下 の

下 の



神の春 四季の眺の色々と愛する浮世と島と
表成飾る昔懐心つまる数珠の袖の内とらまの
薫煩惱の花の色ある小梅の里紀角に住る別荘に
隣る玉屋の寮を買うけ引移来 其人の元浅草
鳥越の貴内橋の辺に住む原由某の娘あきぬとて幼

少ころより手習と習ひ其藝名を鈴川
小春と呼びて江戸町々
の寄席で美人と評判高か
ければ諸大名の館へ召され
座敷手品の所野望に愛敬あ
む手先の早業ゆ意に
適つて十七の春の半に
大窪家の若殿主女に抱ひ玉ひりし日 せ成受て侍女

其西親の浮み出で其翌年コロリと以
る病のこも枕成並て西親と此世を去
跡々外に親族の残る残る残るを
御殿の内引取て栄耀に送る春秋の
替り三年目に罷受つてけし
殿様が頃の本去りし後此世
とらと一回に籠り嘘をもち春看
経にこらなる月日を送る
のみ瘦衰て食事す入るを
と聞て後室より二週同此
暇次賜り箱根の温泉
で保養せよと有かした仰

其外附の侍諸共は宮の下ある本良屋といふ
 旅宿に暫く逗留せし頃對ひ座敷の相客を見物
 頗る慕ひけりといひある術あるがき暇あふぬ
 といふや日限の迫りきて申さへくる思ひ
 でおせめての焦る其人名所
 ぶけも向く宿の女切りに
 頼み探り聞け本町の紀角
 といふ薬種問屋の若隠居
 といふ夜頼みに残して
 立ちくる江戸の屋敷
 敷の究屈と厭
 ふが上の湯治場の
 ざんへの保養が



身に添て折目正の
 禮式ありて思ひ
 のみ
 用ゐる
 俣身
 彼人
 あふむ

易く引く小者頼んで紀角が上敷
 悉く探り今小梅の別荘に
 住むを知て

黒
 台口始終と聞て容





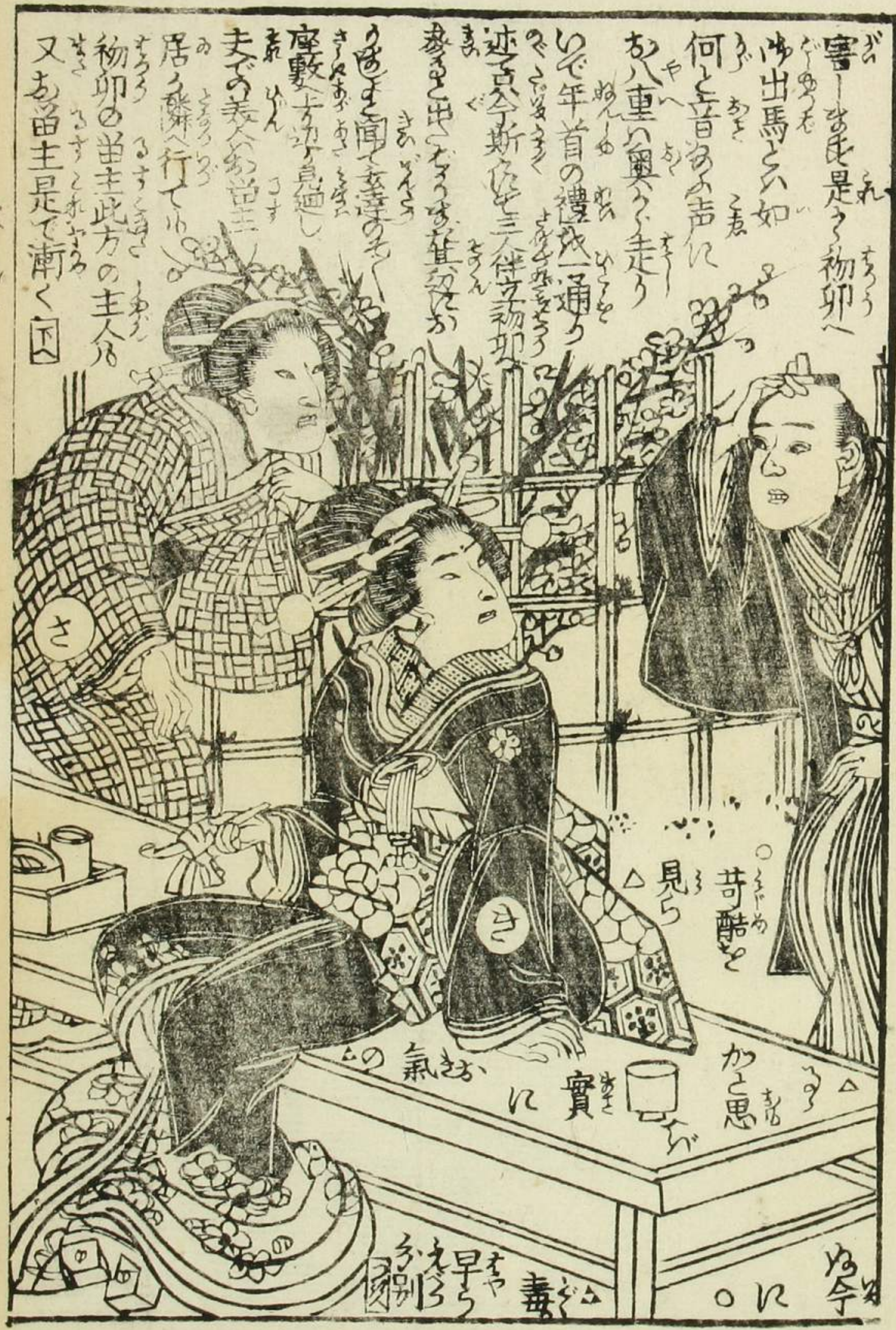
奥向の首尾残つてうひをぬき
病氣と云ふ保善かまへ亡
君の後世成りし庵室に
爰へ移り住みし其時
屋敷の重役か若ら此

世を忍ぶ身の是非のり
か重役家残つた二人
相伴てありくと出かけた跡へ
引ちか訪来し日頃隣
の寮や此
家へお歸
同半々
出入す
場切
の敷
にて

後良縁あつて方付るが
屋敷で世話しつてせん又生か潔く
送るとあつた扶助せん身の振方の
何れも心も依に任せと月々に多く
手當を賜りひれは妹のお尋とこ小
夜の外に下婢二人男といふ此頃新
抱へる下部の甚かみはにて主従六人
豊うたてその暮しける○打をち拍子も
同ト七種の声の方々明そめて霞たる鬼庭の
戸を押入来る二人の客は彼宗匠と豆八は
年首の禮いそぐに今日節句に初卯を待た
み殊に恵方ル午の方は非とも出初のお供を
せんともやし立るに角太郎さか初卯に詣てん



其名
黒林
と呼者る
案内もせ
すに庭先
くヤア
出慶
で
こころ
大將宅なる羨人の
側にまゐり侍つて



害一は是れ是れ初卯へ
 歩出馬と如
 何と音あふ声れ
 お八重の翼く走り
 い年首の禮成一通り
 迹百今斯は三六伴初卯
 夢まといはるは狂狂たか
 り世ま問てま達のち
 座敷十切見廻
 夫の妻人の世
 居る隣へ行てり
 初卯の当主此方の主人
 又も留主是で漸く因

見ら
 苛酷
 加と思
 實
 氣
 早
 毒
 今



居る健康
 宗
 角
 宗

此密にあつては
 思議何れ頼
 度々お尋ね申して
 此咄ありの餘程
 是心
 さら

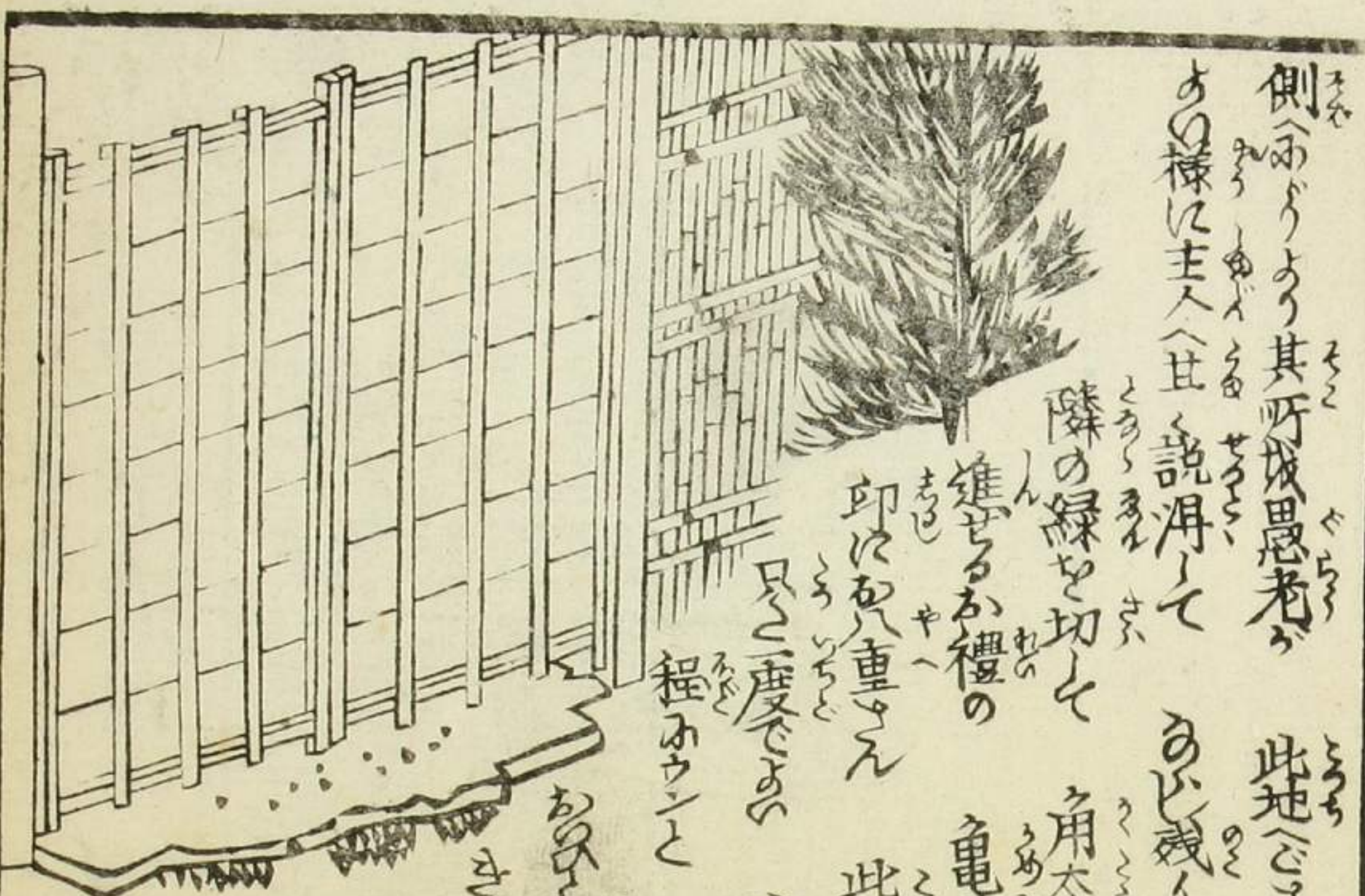
松嵐下



何と言兼て
 味の言兼て
 味の言兼て
 味の言兼て

手先が拂ふて
 飛退く所下女を腕で障子引おけ本町
 四郎吉原が少年首に見おけて聞て驚く
 女達七種のつる遠との野を早々どく

物堅く女子
 其宅へ
 其入が斯も
 和ら死玉ひ



側(あがり)より其野城愚者
 此地(こゝ)は物先にストントンと足踏
 角太郎入の未社成引伴て柳島々
 亀井戸の梅は少し早けれど
 此野(こゝ)で来る久びと梅屋敷夜も見物
 主婦箱根で去年見知りたるあまの群春の初
 戯(あそび)の事(こと)の面白(おもしろ)く遂(つい)に打解(うち)けてまゐる此(こゝ)二群(にぐん)が
 一ツ(ひとつ)の料理店(れいりてん)橋(はし)本(ほん)流(なが)して酌(しやく)を催(もよほ)す互(たがひ)に其(その)真(ま)を
 せし兼(か)せてもなほ願(ねが)はて如何(いか)なる神(かみ)の引合(ひきあ)せにや
 是(こゝ)まで度々(たびたび)女(おんな)達(たち)を夜(よ)と遊(あそ)びに来(こ)られま



一杯あれた七種の初卯のせう近年に
 むの人の出との端々が玄達の云し辞に
 思ひはれぬ板の八真の驚けと口はし
 る云出て輕蔑ぬる耶一彼ま達う
 撮りたる振舞せる押回み只本宅
 う番頭が年首に越せよあ
 を正其場と取る世が
 角太夫より折た
 際の家往通ひ親
 しく交り其内に戀は手
 鍛錬のおきぬの取ぬ夫との心
 情あつる兼草の露けは春
 春風うけて靡けてふむ

△見物に戀が
 漸々に叶ふ

嬉此六世
 同暗う夫婦

みり
 格別
 又樂
 方縁
 敷の
 人の
 濟と戀
 付の願心



輕き媒約の打解
 て角太夫以前に愛
 つ日毎の様は隣なる人込
 むろ衣更始めて玄達の虚
 實と鳴海澄波干に見ぬ沖の舌人そ
 知らぬ朝夕に便る身のみ嘆もつ袂の
 乾く向とも泣き外に此事を相談するのあはしの
 夫此頃家におねの上の身を慎む怨を回んで
 りつても身と仕たる用太のまへ仕へ上を見捨
 られる夫とまてと諦めて見
 ては娘氣の又も思やう行末
 と案出の物思ふ心の内
 隣れあつる板も手取の去年の秋

角
 や
 角太夫
 面倒るる只此上へ
 八重さへ除く

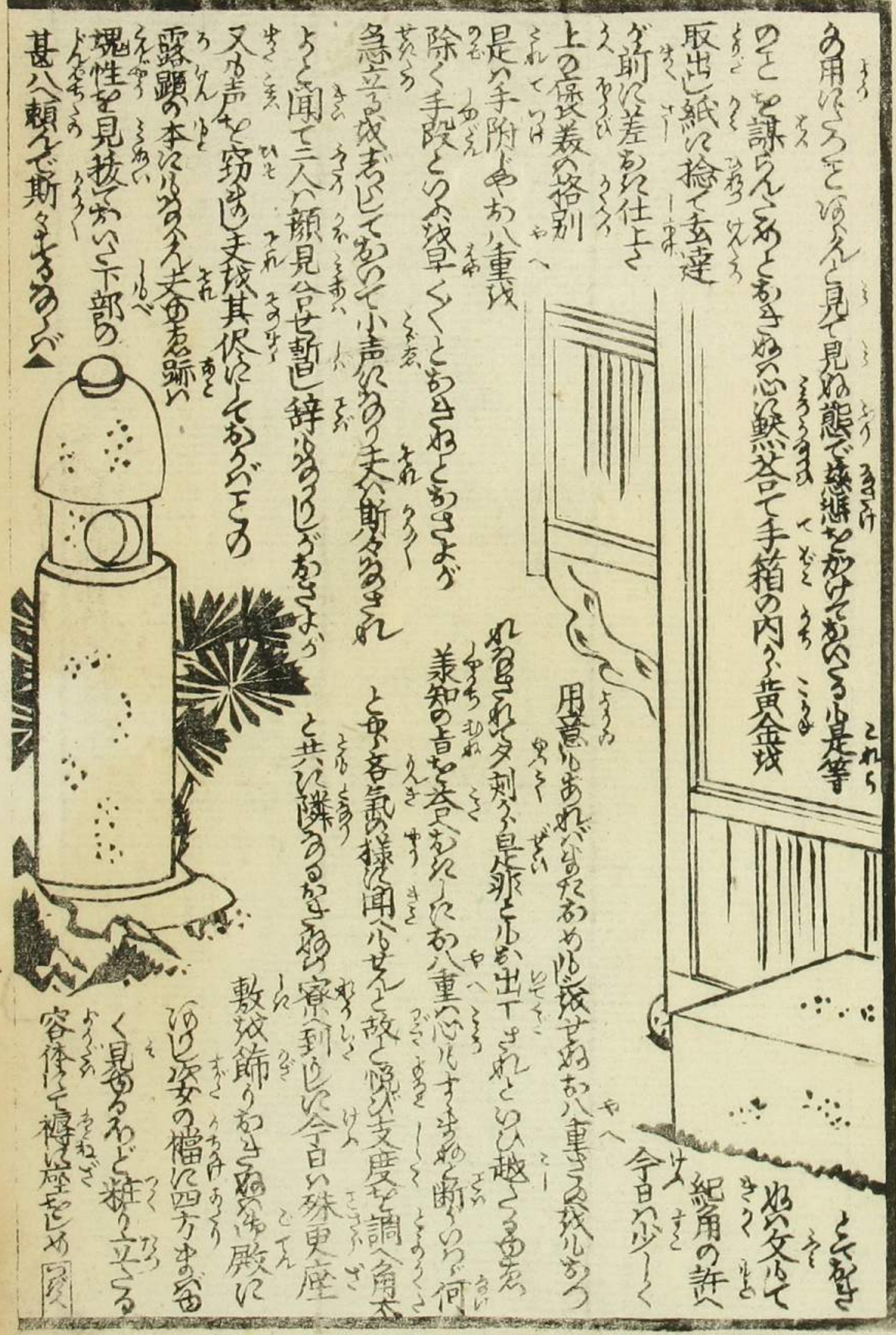
車へハ
 と交
 附
 者あれ
 回バ





相談をよる
 困り那定と思案
 其夜の更行燈火暗さ向
 久伶俐な様で女女二人で晩考する
 出る物その座睡さる是で愚者(男)が
 直み海へ三夫知恵飲お申すらうとのそり出さ
 他人の事彼黒林女達にそ兼て此家出入する内おまよつて剛深
 て人目お心話らふとあやあ知れ三人の腹と黒き性もれ何

此方皇守へ何う手段か
 腹餘り
 跡腹まうの上葉あらん左様
 やと三人長きあふ工みの程怖しけれの今
 日と出た昨日と
 遊春の日の
 長き小暮
 て今日と
 やま目と
 の多幾
 遊び
 骨牌
 正月
 仕舞
 正月
 舞



の用はらそとほんて見て見ぬ態で感懐をかけておるは是等
 のこと謀らんかあともお心懸か答て手箱の内へ黄金成
 取出し紙に檢て玄達
 が取の差おれ仕上
 上の優美の格別
 是の手附もあ八重成
 除く手段とのお早くとおとあおとあおよか
 急立ち成おじておめて小声あり夫ハ斯々おそれ
 よと聞て二人顔見合せ暫し辞めおしおとあおよか
 又お声お窺おし夫成其伏しおとあおよか
 露頭の本はらるんておとあおよか
 魂性を見抜おい下部の
 甚ハ頼て斯々おとあおよか

用意はあれおたおれおたおれお八重さるおれお
 れおとあおよか
 美知の言もあおれお八重お心懸かおとあおよか
 とお各氣様聞おれおとあおよか
 と共に隣おるおとあおよか
 敷飾りおとあおよか
 河の女の備に四方おとあおよか
 く見おれおとあおよか
 容体はとあおよか

岡本勤造綴
 芳川俊雄閱
 思ひも肩あかひるも重故卸し足と
 首と両手をあけ中の釣と南無阿彌陀佛の
 声ゆるるこ隅田の流へふんあところ投そんたり
 ころの舟の棹と男は何者
 ひと善なるや思ふも二編とあみて
 まうたすふん



橋嶋郷編輯
銅版開化玉編全
 島田豊三郎編
開化女用文章全

淡野延房編輯
近世紀聞
 初編より
 九編迄出版
 以下追々発売
 田島象二編輯
畜業取引要文全

淡野延房編
義烈回天百首全
 魯文作
金花七變化
 國貞画

西野古海編輯
東京全圖全
 秀賀作
濡衣女鳴神
 國貞画

交
 地本錦繪問屋
 出版柳届明治十年六月十八日 第六大區二小區深川富岡門前町六十番地
 編輯人 岡本勤造
 第天皇三十四年横山町三丁目二番地
 出版人 辻岡文助



